



この地域で暮らす外国人にスポットを当てて、ご紹介するコーナーです。



『日本の子どもたちのやさしい心』

テリー・レマさん
(タンザニア出身)



私はタンザニアのキリマンジャロ州で生まれました。子どもの頃は、学校から帰るといつも父親が営むコーヒー農園の手伝いをしていました。懐かしい思い出です。現在は、名古屋市内の大学で研究者として学生たちと共に自然エネルギーの研究をしながら、学生の指導もしています。現在所属している研究室はタンザニアと比べて、最新の研究機器が充実しています。恵まれた環境で研究に勤むことができるので、日本の学生は本当に幸せだと思います。将来は故郷に帰り、太陽エネルギー応用技術を発展させるために大学で教えたいと考えています。

研究の傍ら、「NIC地球市民教室*」の講師として、小学校や中学校を訪れて、タンザニアの紹介をしています。子どもたちは容赦がありません。私がつまらない話をするとすぐに眠そうな顔をします。タンザニアでは、先生が話しているのに寝ることは絶対に許されません。厳しく叱られます。私は、どうしたら子どもたちの興味を惹けるか、常に工夫して話すようにしています。日本の教室では、子どもたちにとっても鍛えられます(笑)。

以前、小学校で「私が生まれた村には図書館がなく、

18kmも離れた図書館まで行かなければ本を読むことができません。村の教会に図書館を作りましたが、なかなか本が集まりません。」という話をしました。子どもたちは、自分たちの本や家の人に呼びかけて集めた本を売って、そのお金をタンザニアの子どもたちのために寄付してくれました。始めは50冊しかなかった本が、たくさんの人のおかげで、今ではなんと600冊にもなりました。こんなすばらしい奇跡が起きたなんて、今でも信じられません。特別な取り組みをしたわけではありませんが、日本の子どもたちの温かい思いやりの心を、タンザニアの子どもたちへと繋ぐことができ、幸せな気持ちでいっぱいです。



▲テリーさん(左から2人目)と子どもたち

* NIC地球市民教室:名古屋国際センター(NIC)が地域の小・中学校などを対象に外国人講師を紹介し異文化理解を深めてもらう事業。



子どもニック・ニュース(休み号)を使ってワークショップをしました!

笹島小学校4年生のみなさんが、8月にオープンした「NICライブラリー交流スペース」で、自分たちの暮らしと地球で起こっているさまざまな問題とのつながりを学び、自分たちにできる解決方法について考えました。



1 学校に行けることや安全な水が使えることは「わたしたちの暮らし」の中では「当たり前」ですが、世界には決してそうではない子どもたちもいることを子どもニック・ニュースを通して知りました。



2 地球で起こっていることについて、ライブラリーにある本でさらに詳しく調べました。

3



問題を解決するための方法をできるだけたくさん考えて書き出しました。地球を救うぞ!と子どもたちは一生懸命でした。

4

子どもたちの想いでいっぱいになった「わたしたちの地球」



「水や電気の無駄使いをやめる」「ぜいたくをしない」「学校に行けない子どもたちのために僕は勉強を頑張る」「イラストの子どもたちの気持ちを考える」などいろいろな意見がでました。子どもたちが地球の課題に真剣に向き合った1時間でした。

子どもニック・ニュースはこちらからダウンロードできます



ぜひ、クラスやご家庭でも子どもニック・ニュースをご活用ください。



～国際協力・フィリピン編～

テーマ・環境

自然環境を守ることで現地の人の生活も守りたい

特定非営利活動法人 イカオ・アコ
代表 後藤 順久さん



▲現地の学生たちと植林をする後藤さん(写真一番右)

リーダーズ・メッセージ

現地の人との交流を大切にしています。彼らと同じ生活スタイルで過ごし、お酒も酌み交わす。腹をわって話してもらうための第一歩ですね。20年続けた今、日本人よりも現地の人の友達が多いかもしれません(笑)



【村の振興と環境保護はリンクしている】

フィリピンでの持続可能な社会の実現を目指し活動する環境NGOイカオ・アコ*1。代表を務める後藤順久さんは現地フィリピンが抱えている課題について「アジアで一番の経済成長率があっても、貧富の差が一向に埋まらない」と語ります。収入源となる産業のない村は、身近にある森林を伐採して町へ売りに行く。木々がなくなり、環境は破壊され、村人はますます貧困化していく。負のスパイラルを断ち切るために団体が力を入れて取り組んでいるのが、マングローブの植林、そして有機農業の普及です。

1997年の団体設立当初から続けているマングローブ植林は、通算150万本を超え、ネグロス島パラリン村では森林再生に留まらず豊かになった樹林をめぐるエコツーリズム*2を実現。国外か

らのスタディツアーの受け入れも本格化し、村の振興につながりました。また、同島のパグ村では、標高800mの高山気候を活かし、フィリピンでは珍しい苺の有機栽培に取り組んでいます。強い農業の使用を抑え、水源の水質を守ることも考えています。

森林伐採以外の方法で自活する術を見出す。それが、村の振興だけでなく、環境を守ることにもつながると後藤さんは語ります。

【ミスコミュニケーションの連続。それでも、楽しい!】

「現場はいつもコミュニケーションがかみ合わないことだらけ」という後藤さん。「村人に鉢1つに対し、苺の苗は1つだよと教えても、たくさん収穫したい気持ちからいくつも苗を入れてしまう。で、後で私がひとつひとつ抜いたりね(笑)」

自らの姿勢を見せて、根気強く指導していくスタイルを貫くこと20年。続ける理由も「現地の村人たちの笑顔が素敵」と返答は軽やか。昨年から大学教授の職を辞め、イカオ・アコの活動に専念しています。「結果として報われることも嬉しいですが、現地の自然に、そして何より人に癒されるんです」と、やる気の源について笑顔で語る後藤さん。言葉には活動地への愛がにじんでいます。

特定非営利活動法人 イカオ・アコ

Web <http://ikawako.com/>

Facebook @ikawako.mangrove 検索

*1 イカオ・アコとは現地の言葉で「あなたと私」の意味 *2 現地を訪れて環境保全への理解を深めてもらうこと



名古屋市とトリノ市は今年、姉妹都市提携から14年目を迎えます。今回の「姉妹友好都市の広場」では、トリノ市についてご紹介いたします。



名古屋の象徴「シャチ」と、トリノ市の市章の「雄牛」をイメージしたキャラクターです。

■姉妹都市トリノはこんな街

世界遺産の王宮やマダマ宮殿を中心に、石造りの綺麗な街並みが暮盤の目のように広がっています。ポルチコと呼ばれるアーチ状のアーケードが街じゅうに張り巡らされていたり、街のいたるところに広場やカフェがあったりと、市民の憩いスポットが充実しています。また、中心市街地には坂道がほとんどなく、バロック様式の豪華な教会や、博物館、劇場などの観光名所も、徒歩圏内にたくさん集まっており、観光にとっても便利です。イタリア国内で4番目に大きな都市・トリノは、サッカーチームのユヴェントスや自動車メーカーのフィアット、チョコレート街としても有名です。



▲カステッロ広場にあるパラッツォ・レアーレ(王宮)

■トリノのランドマーク

モーレ・アントネッリアーナは、高さ165メートルの近代トリノを代表する建物で、イタリアの2セントコインのデザインにも使用されており、街のランドマークとしても有名です。展望台に上がるとトリノの街並みやアルプス山脈を望めます。内部は国立映画博物館になっていますが、実はトリノはイタリアで初めて映画の撮影スタジオが作られた街で、かつては映画産業の中心地とも言われていました。現在でも、ロケ地として使われるなど、トリノはイタリアの映画産業において重要な街の一つとなっています。



▲街のランドマークでもあるモーレ・アントネッリアーナ

名古屋姉妹友好都市協会の公式ウェブサイト・フェイスブックでは、姉妹友好都市にちなんだイベント情報などを発信しています。ぜひご覧ください。

Web <http://nsca.gr.jp/>

Facebook [nagoya.sistercities](https://www.facebook.com/nagoya.sistercities) 検索